

ダークリバー

ルシア

## 第1章

---

わたしは二十三歳の時、すでに老後のことを考えていた。いや、正確にはもっと早くから——たぶん中学二年生くらいの頃から、だったと思う。ありがちな話だけれど、わたしの両親は仲があまりよくなく、家庭内別居といったような雰囲気家の居間にはいつも漂っていた。

「じゃあ、いってくるよ」

「行ってらっしゃい」

「おはよう」

「ただいま」

「おやすみなさい」……

小さな頃から、挨拶だけはきちんとするようにと両親から躡けられてきた。隣近所や学校では、「松本さんちの頭のいいお嬢さん」として有名だったし——でも、ただそれだけだ。家庭にあるのは必要最低限の、冷たくも暖かくもない会話と、豊かな電化製品、満ち足りた衣食住——これ以上を望むのは贅沢というものだったろう。それでもわたしの家庭には、何かが決定的に足りなかった。それは愛情と呼ぶにはあまりにも——あまりにも悲しいものだったから、わたしはそのことを口にだすことさえ厭った。

（わたしは、お父さんやお母さんみたいには、絶対にならないわ。そうよ、恋なんてしても馬鹿らしいだけ。結婚したら結局、父さんや母さんみたいになっちゃう。それだったら、一生独身で、真面目にコツコツ働いてお金貯めて、老後は介護付き老人ホームみたいなところにでも入ったほうがずっとましよ）

「ねえ、そうよね？モロゾフ？」

あたしは飼い犬の真っ白い雑種犬のモロに、そう話しかけた。モロはそうとも、そうじゃないとも言わず、ただゴロリと寝転がり「撫でて、撫でて」と美しく黒い瞳で訴えかけてくるだけ。

モロのことは、小学五年生の時、下校途中で拾った。モロは雑種犬とは思えない毛艶の良さと上品な顔立ちをした中型犬で、あたしは雨の中、目と目があった瞬間に、彼女の存在のすべてにすっかり夢中になった。

「おっぱいが大きいところを見ると、子犬を産んだ経験があるんだろう。キヨミ、この犬はきっと、どこかで飼われていたに違いないよ。第一、とても人懐っこいし……まず新聞に迷い犬の広告をだして、それで飼い主が現れなかったら飼うことにしよう」

父がそう提案すると、母はみるみるしかめ面になったが、それでもあえて何も言わなかった。

「きっと必ず、元の飼い主が見つかるわよ」と、子供の心を軽く刺す以外は。

小学五年生だったあたしは、一週間か二週間くらいだったろうか。神さまに毎晩欠かさずお祈りをした。テルテル坊主を軒下にふたつもみつつも吊るして、「お願いします、神さま。モロをうちの犬にしてください」と必死に願った。果たして神さまは幼子の祈りを聞き届けてくださったのかどうか、元の飼い主は名乗りをあげず、晴れてモロは松山家の犬となった。

モロは、とても不思議な犬だった。どこかから逃げてきたのか、それとも捨てられたのか、それはわからなかったけれど、とにかく信じられないくらい陽気で明るい犬だった。乳首がひとつ残らず大きいところを見ると、彼女は五六匹の犬を出産して育てた経験があるはずだった。にも

関わらず、自分の子供たちが今どこでどうしてるかなど、彼女の頭にはまったくないようだった。かといって、自分だけ衣食が事足りて幸せならそれでいいと感じているわけでもなく——なんというのだろう、動物が持つ独特の達観精神のようなものを、極限まで極めてしまったみたいなところのある犬だった。

モロは父に対しても母に対してもあたしに対しても、示す反応が平等だった。とにかく誰かが帰宅すれば尻尾を振って出迎え、ソファや床にごろりと寝転がり、「撫でて撫でて」と艶っぽい黒い眼差しで訴えかけた。その魅力には普段厳しい母でさえ逆らうことができず、顔の筋肉が自然と緩んでしまうようだった。

モロはあたしが十九歳の時に死んだけど——あたしは不思議と悲しくなかった。もしかしたらそれは彼女に特有だった達観精神が、十年近い歳月をかけて、徐々に徐々に、あたしの魂に沁みこんでいったせいなのかもしれないと、そんなふうにも思う。

某私立高を卒業後、あたしは地元——札幌にある中堅の不動産会社に就職した。モロが死んだのは確かその頃で、あたしは彼女が死んだ以上、麻生の実家にいる必要はもはやまったくくないような気がして——平岸にアパートを借りて、ひとり暮らしをはじめた。

それから五年。

生活はまあまあ順調だった。会社では事務員として能力を高く買われていたし、これといった大きな対人トラブルのようなものもなく——時々横柄な上司の愚痴につきあう程度——あたしは介護付き老人ホーム入所に向けて、毎日真面目にコツコツ働いていた。ボーナスはほとんど貯蓄にまわし、節約をかねたエコロジカルな生活（たとえば聞こえはいいが、ようするに楽しいケチ貧乏な生活）を謳歌していた。

ちらしを見て一円でも安いスーパーへ買物にいき、手堅い株に投資をし、貯蓄術や節約術といった本を片っ端から読み耽った。わたしにもし唯一趣味があるとしたら——〈ケチ〉と〈節約〉、この二文字であったかもしれない。

ところがそんなあたしの人生に最近、暗雲が垂れこめてくるようになった。毎晩のように、嫌な夢を必ず見るのだ。

——ぴちゃ、ぴちゃっ……。

——ガリガリ、ゴリゴリ……。

——バリっ、バリゴリガキッ……。

闇の中、あたしの〈魂の〉肉やら骨やらを、何やら言い知れぬ不気味なものが貪っているのがわかる。腕、目玉、脚……それは死んで役に立たなくなったものなので、彼らは食べたい放題だ。無造作に腕をもぎ、目玉を抉り、脚の肉を引き裂く。

(やめてえええっ！)

ついに〈肉体の〉あたしは堪え切れなくなって、がばりとベッドの上に身を起こした。六時二

十九分……目覚まし時計の鳴る一分前だった。

あたしは汗でびっしょりのパジャマを脱ぐと、まだどきどきしている心臓に両手をあてた。

(この夢はたぶん普通の夢じゃない。病院へいったほうがいいんだろうか?……)

あたしは地下鉄東西線に揺られていつもどおり出勤しながら、頭の中で電話帳のページを捲った。朝、でがけに病院の精神神経科のところをチェックしておいたのだ。一週間も続けて同じ夢を見るなんて——それもこの上もなく不吉で嫌な夢——尋常ではないと思った。今のところ、仕事に障害がでたりはしていないが、近いうち、何かとんでもないことが起きるような気がしてならなかった。

「キヨミちゃん、なんだか最近顔色が優れないわね」

そんなことないです、と言いかけて、あたしは口を噤んだ。さっきトイレへいったら確かにちょっと青白いような顔をしていた。頬に軽くチークを入れたり、少し赤めの口紅を唇にのせたりしても、かえて他の白い肌が際立ってしまう。あたしは長年の事務の相棒である中川女史に、思いきって相談してみることにした。彼女は社長の次に偉いといっても過言ではない、清苑不動産に勤務して今年で二十七年という、ベテランの経理事務員だった。

「ふうん。毎日その、変な夢を見るんだ。ちょっと聞いた限りだと、なんていうか……まあ普通じゃないわよねえ。こういう場合ってやっぱり、病院とかで診てもらったほうがいいのかしら？」

「自分でも、よくわからなくて……」あたしは不動産売買契約書をチェックするのをやめ、目頭のあたりを手でこすった。少し、眠い。「夢の内容がかなり尋常じゃないっていうか、冷たい石棺の上に自分の動かなくなった死体が置かれているのがわかるんです。それで、そのまわりに動く石の足だけが見えて……」

「<石の足>って？」と中川女史が繰り返す。

「ええ。足から上は真っ暗な闇に紛れて見えないんですけど、それでも視覚以外の何かで感じるんです。あたしは何か、動く石の像みたいなものに、自分の魂の肉や骨を貪られているんだってことを」

「うーん……」中川女史は事務机の前で腕組みし、人の善さそうな丸顔を少し、曇らせた。

「キヨミちゃん、わたしが物凄い占いマニアだってこと、知ってるわよね？」

「あ、はい。昼休みとか、占ってもらったのが当たってびっくりしたの、今も覚えてます」

「実はね」と、中川さんは少しだけ声をひそめて言った。経理部長は今外出中で、狭い経理部門の室内には、他に誰もいなかったにも関わらず。「あたし以上にとんでもなく占いの当たるばあさんがススキノにいるんだけど、一度会って見ない？」

「はあ……」あたしはきょとんとして、軽く首を傾げた。

「そのね、いい歳したおばさんがこんなこと言ったら不気味に思われるかもしれないんだけど、あたし、昔から物凄く神秘的なものに興味があったのよ。世界の七不思議とか、ノストラダムスの大予言とか……まあ科学的にいったら、一度病院の精神神経科？そういうところで診てもらったほうがいいのかもしれない。でも病院の先生の手にも負えないようだったら、一度そのおばあさんのとこに試してみるといいかもしれないわ」

「そう、ですね……」

中川さんは社用箋に簡単な地図を書き記すと、向かいのあたしの机の上についっとそれを差しだした。

「そのおばあさん、閻川ヨミっていうんだけど、本当にほんまものの占い師なのよ。業界でも影の陰、裏の裏の占い師って感じらしくてね、わりと表にでてる占い師がわざわざ占ってもらいにいく占い師っていえばわかるかなあ。とにかくそういう人だから、夢見が悪いって言えば、何かおまじないになるものをくれたりすると思うのよ」

「えっと要するに、習字で〈獾〉と書いたものをベッドの頭に貼るとか？」

「キヨミちゃんも一度いってみればわかるわ」茶化そうとしたあたしを、中川女史は眼鏡の奥から真剣に見つめた。「なんであたしがそんなばあさんと知りあいなのかっていうのはあくまで内緒なんだけどね、まあ見料は二千五百円くらいだから、騙されたと思って一度見てもらうといいわ」

どうしたもんかなと思いつつ、あたしは中川女史が描いてくれたススキノの地図を眺めながら、その日の午後は二十日締め請求書を印刷し、それに宛名を書いて終わった。

——P. M. 7時30分。

あたしは白石駅から電車で揺られ、大通り駅で降りるとススキノまで歩いていった。きらびやかなネオンサインの下を、夜はまだこれからといった人々がいき交っている。背広姿のサラリーマンに、男女の若いカップル、その他年齢層は様々だ。四十代か五十代くらいのおばさんたちが横並びになって通行の邪魔をしていたり、かと思えばシャッターの下りた店の前でギターをかき鳴らす高校生のグループがいたり……あたしは飲み屋が軒を連ねる通りを、地図を見ながら首をきょろきょろさせた。拳動不審に思われたのかどうか、何かの呼びこみらしい黒服の男に声をかけられたりもしたけど——あたしは終始徹底無視して、目的の〈閻川ヨミ〉さんのお宅を探した。

中川女史の話によると、今は使われていない雑居ビルと、ボクシングジムの間に挟まれているとか……あたしは紫や黄色や桃色などの、極彩色のネオンサインを見上げながら、本当にこの方角でいいのかしら？と首を傾げたくなった。地図に従うとするなら、確かに間違いはないのだけれど。

あまり人通りの多くない飲み屋の通りを抜けると、いきなり閻の溜まり場のような空き地である。空き地には〈社有地〉と看板が立っていたけど、どこの会社のものかは明らかでない。有刺鉄線に沿って、明かりのない道をとぼとぼ歩いていくと、ぽっかり豆電球が燈っている木造の平屋の家屋があった。近くまでいくと、確かに隣は廃墟のような雑居ビルらしき建物で、ボクシングジムに至っては、何故か看板に〈ボクシング事務〉と悪戯書きされているという荒れようだった。

一瞬その落書きにぷっと吹きだしそうになりながら、あたしは山吹色の豆電球の下に立ち、心を入れ換えるように深呼吸した。病院に電話してみると、その多くが予約制で、どんなに早くても診てもらうのは来週以降になるということだった。もしまた一週間もあの夢を見続けるとしたら——あたしは多分どうにかなってしまうだろう。それじゃなくても食欲とともに、体重がどん

どん落ちてきているのに。

「すみません。わたし、中川敦子さんの紹介できた、松山清美という者なんですけど……」

あたしは木とガラスで出来た横開きのドアを開け、小さな声でおそるおそるそっと挨拶した。七月だということにも関わらず、室内には小さな電気ストーブがひとつたいてあり、微かな熱波が玄関先まで漂ってくる。十畳ほどの居間らしき場所には、豆電球がひとつ小さく光っているだけ。見たところ、電気ストーブ以外に電化製品と呼べるような代物は他になく、古い畳敷きの埃っぽい感じのする部屋には、背の小さなおばあさんが背中を丸めているだけだった。

「あのう……」

もしかして耳が遠いのだろうかと思い、あたしは少し大きな声で言ってみた。おばあさんはストーブに両の手のひらをかざしたまま、振り返りもせずに言う。

「寒いから、早くそこの戸を閉めとくれ。あんたがここにくることは、とっくにわかつつた。夢見が悪いんじゃろ？ そうじゃな？」

「えっと、その、まったくそのとおりなんですけど……」

もしかして、中川さんから連絡がいったのだろうか？ そう思いながら、あたしは戸を閉め、玄関で靴を脱いだ。

「おお、さむ……。まったく冗談じゃないよ、七月だっていうのにさ。あんたもこっちにきてストーブにあたるといいよ」

この熱いのにストーブにあたれだって？ それこそ冗談じゃないよ——と思いかけて、あたしはぎょっとした。居間に上がってみると、すぐ脇にさびれた台所があり、そこにあった青い大きなポリバケツには、水死した鼠の死骸があったからだ。

「ああ、それね。べつに気にするこたあない。この家は見てのとりのボロ屋だからね、台所の下に鼠の奴がしょっちゅうでるのさ。そいつは今朝、鼠捕り機に引っ掛かってたのをバケツの水に沈めて殺したんだ」

あたしが声もなくその場に立ち尽くしていると、闇川ヨミという名のばあさんは、初めてこちらのほうを振り返った。

「やれやれ。あんた、こんなところまでくるわりには、意外に小心なんだね。たかが鼠一匹にそんなにびくつくなんてさ——まあ心配しないでいいよ。その鼠の内臓を引っぱりだして、ネズミ占いとかね、あたしはそんなことはしやしないから」

くくく、と喉の奥で笑うおばあさんのことをまだ少し不気味に思いつつ、あたしは部屋の中央あたりに正座した。本当に、小さなストーブ以外何もない部屋だった。もしかしたら襖の奥にもうひとつあるらしい部屋が。おばあさんのプライベートルームで、そこに大切なものがすべてしまわれているのだろうか？

「あんた、敦子の紹介できたとか言ってたね。まあ昔からの馴染みの客の紹介ってことで、特別に見料のほうはただにしてやるよ。そのかわり、ひとつだけ条件がある」

「はい」

「あんた、ここへきたことは他の誰にも言うんじゃないよ——そうさね。まあ信頼できる人間になら、ひとりだけ話してもいい。でも

それ以上は駄目だ。その約束が守れるなら、あんたのことを占ってやろう」

「わかりました」

あたしが神妙な顔つきで頷いていると、おばあさんは頭に被っていた紫色のショールを外して、畳の上に敷いた。そして灰色のコートの内側から黒水晶の玉をとりだし、それを三角形のショールの中央に置いている。

「ふうん。可哀想にあんた、どうやら家族愛に恵まれずに育ったようだね」

黒水晶の玉の上におばあさんが両手をかざすと、それは深緑色に変色し、さらにおばあさんが手を交互にまわし続けると、濃い青色へと変化していった。

「は、はい」

あたしはその水晶の玉の、あまりに美しい色合いに目が離せなくなりながら言った。父と母は三年前にとうとう離婚した——あたしが成人したので、これで親としての義務は果たした、というのがその理由だった。

「父と母は、昔からずっと、一階と二階で家庭内別居しているような状態だったんです。ごはんを食べるのも別々で、あたしは母と一緒に食事をしながらも、上の父がインスタントものを食べたり、コンビニのお弁当ばかり食べたりしているのがいつも気になっていました」

「ふむ。で、あんたはそんな両親を見て育ったから、結婚に夢ってもんをまるで持ってないようだね。このまま敦子みたいにオールドミスになるつもりかい？」

「えっと、その……」あまりにズバリと言い当てられて、あたしは言葉に詰まった。

「でもあんた、このまあいったら何年か後に発狂するよ」

「えっ!？」

「水晶玉にそうでてる。あんた今、一体どんな変な夢を見てんだい。もちろんそれだって、あてようと思えばあてられなくもない——けどあたしも歳をとったからね。あまり余計に力を使って寿命を縮めたくない。よかったら、あんたのほうから話しておくれでないかね」

「はい」

あたしは正直に夢の内容をすべて話した。最初は自分の体が石棺に安置され、そのまわりを得体の知れない何かがひたひたと歩きまわっていた。その夢を見たのが三日。それからその＜何か＞があたしの亡骸を石棺の中からはとりだし、貪り食べはじめた。そしてその＜何か＞が何者なのか、意識を集中すると、石棺の下のあたりに石の足が見えた。はっきりと見たわけではないけれど、イメージとしては、バリ島やアンコールワットの寺院にある石像といった感じがした。彼らの体の関節の動きは、あたしの死体を食べれば食べるほど、どんどん滑らかになっていくようだった。

「ふうむ……」おばあさんは暑さのせいではなく、脂汗を流しながら、なおも水晶の上に両手をかざし続けた。黒水晶の色が再びまりものような深緑に、また深い海の底のような暗紫色に変化し、最後に真っ黒く沈黙する。

「一番簡単で手っとり早い方法は、結婚することなんだけどね——でももちろんこれだって、誰でもいいってわけじゃないから、難しい話さね。ようするにあんたには、あたしや敦子と同じく、ある種の巫女としての能力が備わっているんだ。敦子なんかは、わりと小さな頃からその能力が顕著であったために、あたしたちの世界に入るのも早かった。でもあんたはずっと、自分の中

のそうした能力に気づくことさえなく、これまでずっとそれを抑圧し続けてきたんだ。将来は自分でマンションの一室でも買って、優雅なひとり暮らしを夢見てるんだろ？でもあんたの心はいつまでも石のようなまんまだ。もともとあった能力を活かそうとしなかったツケがまわってきて、そう遠くない将来、あんたは精神病を発症するだろう。あたしの話、あんた信じるかい？」

あたしは喉に石が詰まったみたいに、何も言えなかった。たぶん、精神神経科で来週あたり診察してもらったとしても、病的な兆候など何も見られないだろう。せいぜいが、精神安定剤を処方されて終わりといったところだ。でもこのおばあさんの言うことは本当で、確かに間違いなく、そんな気がした。

「信じます。わたし、おばあさんのこと……でも、結婚すれば発狂しないで済むって、それはどうしてなんですか？」

「いいかい。あんたは今、自分ひとりだけのために生きてる。お国に税金を払い、年金をきちんと納め、ゴミもきちんと分別して投げてるかもしれないさ。誰にも迷惑かけずに生きてるって、自分ではそう思ってるかもしれない。でもね——このままいったらあんた、絶対に間違いなく、交通事故にあったり、精神病じゃなくても、重い病いにかかって『どうしてあたしがこんな目に』っていう運命に出会うよ。そして言うのさ。『真面目にコツコツがんばって生きてきただけなのに、何も悪いことなんかしてないのに、どうして』ってね。あんた、運命を呪いながら惨めな最期を迎えたいかい？」

あたしは大きく首を振った。ささやかながらも幸せに、それが万民の願いというものだろう。「じゃあ、今日から早速、ライフスタイルを変えなさい。いきなり百八十度変えるっていうのは難しいだろうから、一日ひとつでいい、いつもと違うことをするように心がけることだよ。それと今勤めている会社はなるべく早く辞めなさい。あんた、その若さにしてすでに、今結構貯金があるだろう。そんな金、このままいったら結局全部無駄になるんだと思って、もっと別のことにお使いなさい。なに、心配しなくていい。あんたは物凄い金運の持ち主だ。金が一円もなくなったらどうしようなんて、これっぽっちも考える必要はないよ。そろそろなくなりそうでしょうって頃に、必ず収入がある。そういう星回りなんだ。ただその星回りを自分の利益のためだけにしようとする、運命の軌道に狂いが生じる。まあ事故にあったり病気になっても、早い段階ですぐ改心すればいいんだけどね——難しい人間にはいつまでたっても難しい話さ」

「ありがとうございます、おばあさん」あたしは正座したまま、畳の塵に額をつけるようにして、閻川ヨミさんにお礼を言った。「でも、ライフスタイルを変えるって、具体的にはどうしたらいいんでしょう。いつもと違うことをひとつって言われても……それは具体的にはどんなことなんでしょうか？」

「そうさね。まず今日は家に帰って会社にだす退職願いを書きなさい。あんた、顔色悪いけど、きちんと朝ごはんは食べてるかい？ここへきてあたしに会ったことで、悪い夢の影響は一時的に抜けるだろうけど——言いつけどおりにしないと、今よりもっと悪くなるからね。まず美味しいものをしっかり食べて、栄養を十分蓄えなさい。いつもと違うことなんて、考えればいくらでもあるはずだよ。これから毎日朝は納豆を必ず食べるとか、そんなことでいいのさ」

「はい、わかりました」

あたしはもう一度閻川さんに深々と頭を下げ、バッグの中のお財布に手をのばした。見料はた

だでいいと言われたけど、二千五百円どころでなく、二万五千元くらい払いたいような気持ちだった。

「そんなことは本当に気にしなくていいよ。あたしも久しぶりに面白い人間を観ることができて、忠告のしがいがあったしね。それと最後にもうひとつ……あんな、真面目そうな感じのインテリアが好みみたいだけど、そういうのとははっきり言って相性悪いね。むしろ逆に正反対のタイプを選ぶようにしなさい。といっても、これはなかなか難しいことだとは思うけどね——人はどうしても、自分の内なる基準を元にして異性を見るから」

「はい。肝に命じておきます」

あたしは三度、おばあさんに向かって深々とお辞儀をすると、閻川ヨミさんの不思議なお宅を辞去することにした。

玄関をでて振り返ると、表札に閻川と黒く彫られているのが目に入った。本名なのかどうか分からないけど、とても変わった名前だ。でも何故かあのおばあさんにぴったりの名前だとも思った——見た目はどうってことのない、普通の小柄なおばあさんだし、次に街中で会っても閻川さんと気づくかどうか分からない。そのくらい没个性的で、平均的な日本人のおばあさんという感じではあったけど——あのおばあさんの名前は何故か、閻川ヨミ以外考えられないと、そんな気がするのだから不思議だった。

その日、あたしは帰り道の途中でコンビニに寄り、有機丸大豆の納豆を三パック買って帰った。そしてコンビニのポイントを計算しながら、こんなケチケチしたことを考えるのももうやめたほうがいいのかなと思ったりした。

(背に腹は変えられぬ。お金で命は買えりゃせぬってやつよね)

あたしは平岸のアパートに戻ると、早速とばかり白の便箋に退職願いを書き——本当に久しぶりにきちんとした食事を作ってそれを深く味わった。今日もあの不気味な夢を見るのではないかとの、神経症的な不安が心から消え去っているのが不思議だった。夢なんか絶対に見ない、見たとしてもそれはお花畑で花を摘んでいるといったような、他愛のない夢だろうと、絶対的なまでに確信していた。

## 第2章

---

次の日、あたしは自分の直属の上司である経理部長に退職願いを提出した。彼も突然のことで驚いたようだった。

「もしかして寿退社なのかな？君は中川くんの後を継いで立派な局になりたいとよく冗談で言っていたから、ぼくとしても期待していたんだがねえ。まあ次の人にみっちり仕事を引き継いでから、辞めてくれたまえよ」

「もちろん、わかっています」

寿退社についてはあえて否定しない。ただの嫌味だと、あたしにも中川女史にもよくわかっている。細かい計算が大好きな、カメレオンみたいな顔の男——次に入るであろう事務員も、彼の小さなことに難癖をつける性格には辟易させられることだろう。

「寂しくなるわね。もしヨミ先生の予言がなかったら、あたし、何がなんでもキヨミちゃんのこと、説得してたと思うわ。この会社に入社して二十七年、五人くらい相棒の事務員がかわってるけど——キヨミちゃんくらい一緒に仕事をしていて気持ちのいい子、他にいなかったもの」

「そんなふうには言ってもらえて、凄く嬉しいです」

不意に何故か、涙がこみ上げた。嫌味なカメレオン上司のことを抜きにしたとしたら、清苑不動産はとても働きやすい職場だった。他に十名近くいる営業マンたちとは別の、隔離されたスペースで、気の合う友達みたいな中川さんと比較的のんびり仕事できた。これから先どんな職場に就職したとしても、これほど恵まれた環境を望むことはおそらくできないだろう。

「あたしも、中川さんのこと、きっと絶対忘れません。まだ新しい人も決まってないのにこんなこと言うの、おかしいかもしれないけど……あたしももう二度と、中川さんみたいに仕事のしやすい人と巡りあうことはないんじゃないかって、そんな気がするんです」

そのあとも中川さんとあたしは、カメレオンがどこかへいったあと、彼女の占いの能力のことや、これから先どうするつもりなのかについてなど、仕事の合間合間にコーヒーやお茶を飲みながらいつものように楽しく談話した。

一か月後、新しく若月菜摘さんという、あたしよりひとつ年下の女の子が入社することに決まった。今はよほど買い手市場なのかどうか、その一月の間に三十人以上の人が面接にきていた。若月さんは背が低くて小太りで赤ら顔の、あたしが言うのもなんだけど、ちょっと田舎くさい感じのする女の子だった。化粧っ気などまるでなく、癖のある髪を生ゴムで一本に束ねている。

カメレオンが何故面接で若月さんのことを選んだのか、なんとなくあたしにはわかるような気がしていた——というのも、隣の応接室で面接が行われるたびに、お茶を運んだのはあたしだったから——彼女の他に、もっと仕事のできそうな人、あるいはしっかりした経歴の持ち主、簿記の資格を持っていて事務経験のある人……などはたくさんいた。にも関わらず、カメレオンは鈍くさそうで（若月さん、ごめん）簿記の資格も事務経験もまるでない若月さんのことを選んだ。それは何故か？答えは簡単。時間をかけて仕事をしっかり教えこみさえすれば、若月さんは中川女史の局の地位を継いでくれるだろうと、経理部長はそう踏んだのだ。

「顔が綺麗でスタイルのいい娘っていうのはさあ、すぐ結婚しちゃうでしょ？せっかく仕事を丁

寧かつ親切に教えても、一年かそこらで辞められちゃあねえ。だったらやぼったい感じのする、ちょっとやそっとじゃ辞めなさそうなお尻の重い女の子、雇ったほうがいいでしょ？」

カメレオンは黒縁の眼鏡をふきふき、いつものようにそんなセクハラ発言を平気でしていた。あたしは口をへの字に曲げている中川さんと目線で会話を終え、ただ黙々と手元の伝票や帳簿などを片付けていった。若月さんがトイレにいていて、席を外している時のことだった。

「先輩、再びよろしくお願いしまあす！」

元気いっぱい若月さんは、トイレから戻ってくるなり、どかんと事務用の椅子に座り、つつと隣のあたしの机にまですり寄ってきた。人懐っこい子だ。

「先輩、わたしここに就職できてとっても幸せです。あたし、前の職場でもものすごくいいじめにあっててえ、大変だったんですよ。これ、飴あげます、お近づきのしるしに。はい、中川女史と部長にも」

あたしはミント味のキャンディを受けとりながら、何故彼女が物凄いいじめにあったのかがわかるような気がしていた。なんとなく。それでも若月さんは不思議な魅力で、カメレオンのじっと湿ったねちっこい性格さえも一段階パッと明るくさせるといふ驚異的な業をたったの一週間で行ってた。

「部長のセクハラ発言なんてえ、わたしが前の職場で経験していたいいじめに比べたら、蚊のおならか蠅のしょんべんみたいなもんですよ」

昼休み、三人で休憩室で休んでいる時に、若月さんはお弁当を広げながらそう笑った。しゃべり方に独特の癖があるけれども、この子はあくまで天然なのだ。慣れてくるとべつに何も感じることもなく、あたしも中川女史も、彼女のキャラクターに自然と馴染んでいた。まるで一年以上も昔から三人でタッグを組んで仕事をしているみたいに。

「でも、ナツミちゃんみたいないい子が入ってきてくれて、あたしも本当に嬉しいわ。キヨミちゃんとは特別仲良しだったから、もう次の子とはそんなに仲良しさんにはなれないだろうなあって思ってたの。でも三人でこんなに楽しく仕事できて——なんだかキヨミちゃんが辞めちゃうのがもったいないっていうか信じられないっていうか」

「そうですよねえ。どうして先輩、こんないいところ辞めちゃうんですかあ」

「まあね、事情があるのよ。色々」とあたしは三人分のお茶をポットから淹れながら言った。「でもあたしも、ナツミちゃんがきてくれてなんだか凄くほっとしちゃった。仕事はなんといってもチームワークと親和力が一番大切なもの。これまではね、カメレオンが目の上のタンコブみたいに邪魔くさくて仕方なかったんだけど——ナツミちゃんみたいに、明るく前向きに真っすぐぶつかっていけば意外に変わるものなのねえ。びっくりしちゃった」

あたしと中川さんはくすくす笑いあいながら、互いのお弁当のおかずを一品、交換しあった。厚焼き玉子とウィンナーソーセージをトレードする。

その後、九月の半ばに会社を辞めるまでの間、あたしは毎日仕事をナツミちゃんに教えるのが楽しくてたまらなかった。彼女は確かに物覚えの速いほうではなかったけれど——それでも、あたしがいなくなったあと、しっかりひとつひとつの仕事をこなせるよう、引き継ぎノートに事細かくメモしまくっていた。その熱心さを見ていると、あたしのほうでも一生懸命教えようという

気になったし、彼女の馬鹿っぽい話し方の裏に隠されたひたむきで真摯な性格に触れると——人生で一番大切なことがなんだったのかを思いだせそうな感じがするのが、何より不思議だった。

家賃が月二万五千円の1LDKのアパートからは、すぐ隣の立派なお屋敷の庭が見下ろせる。丈高い立派な松の樹や赤い実を实らせるナナカマド、紅葉している楓、それから黄色い葉っぱがはらはらと舞うイチョウの樹……昔住んでいた麻生の一軒家の隣にも、同じようにイチョウの樹が一本あったのを、この季節になるといつも思いだす。楓などの落葉樹が秋に紅葉するのは自然なことだと、子供心にもそう思っていた——でもイチョウは違う。夏の間は瑞々しいくらい緑なのに、秋になると黄色くなり、その上実を实らせる。あたしはモロと一緒に近所を散歩しながら、隣の家のイチョウの樹を、とても不思議な眼差しで見上げていたと思う。そして銀杏の葉と実を拾い集めて、モロと一緒に嬉しい気持ちでいっぱい、家の玄関に駆け上がっていったっけ。

「ねえお母さん、これ見て！」

あたしは他に、道端で拾ったどんぐりやげんごつなどの戦利品と一緒に、その銀杏の葉っぱと実を母に見せた。珍しいものを見てきっと母も喜んでくれるだろうと、そう思ったのだ。

「駄目よ、キヨミ。そんなばっちいものを拾ってきたりしちゃ。それより、早くきちんとモロの足の裏を拭いてちょうだいね。黴菌が体の中に入って風邪をひいたりしたら大変でしょ」

——わたしの母は、極度の潔癖症だった。はっきり言って、それが父と母が別れた理由だったとっていい。お母さんは多分、父さんのことを深く愛していたから結婚したのではなくて、立派な家や高い給与といった、父さんの経済的条件のようなものと結婚したかったのだと思う。どちらかという大雑把な性格の父さんは、わりと機嫌のいい時には母さんのことを適当にあしらっていたけれど、機嫌の悪い時には面白くない顔をして煙草を吸っていることが多かった。ひどい時にはほんの些細なことで口論となり、夜中まで戻らなかったこともある。

「頼子はね、男とか家庭とかじゃなく、家そのものと結婚したかったんだよ」

お父さんとお母さんの間の仲をとりなすために、よくおばあちゃんがうちにきて、そう言っていたのを思いだす。だからどうか堪忍してやってくださいな、と。その<家>の中には喜春さんのことも含まれているし、清美のことだって含まれているのだと、そう思って……。

おばあちゃんの言うとおりの（ちなみに母は今実家に戻って、今年八十四歳になる祖母の介護をしている）、母さんの<家>そのものに対する執着は、フェティッシュといってもなんら差し支えないくらいだった。自分の気に入った家具や調度品に囲まれていることにこの上もない安らぎと幸福を感じるという、母はちょっと変わった人だった。だからその自分の気に入っている空間を乱されるのが嫌でたまらなかったのだ。それがたとえ自分の夫であれ、血の繋がった娘であれ。

やがて年月とともに彼女の夫に対する愛情がどんどん薄れていくと、父さんは母さんにとって目障りな粗大ゴミ以外の何ものでもなくなった。ようするに、相手が何をしていても気に入らないようになり——そうすると喧嘩が絶えないようになり——最後には一階と二階とで完全なる別居生活を送るようになったのだ。

わたしの両親はそんなふうにして、あたしが成人するのとほぼ同時に、正式に離婚した。

閻川ヨミさんの「毎日ひとつ、いつもと違うことをしなさい」という言いつけを、あたしは忠実に守っていた。毎朝有機丸大豆の納豆を食べることからはじめ、その次にはまず家計簿をつけることを辞めた。それからその次に、毎日会社帰りに何かひとつ、無駄使いをすることに決めた。最初は100円コーナーでケチな買物ばかりしていたけど——それにも飽きると、小さなサボテンの鉢植えや食卓テーブルに飾る花、観葉植物などを集めることに懲りはじめた。

さらに、それにも飽き足らなくなったあたしは、来年の春に向けてヒヤシンスやチューリップ、ラッパ水仙やグラジオラスの球根を園芸ショップで買い漁るようになっていた。自分でも一体どうしてしまったのかよくわからなかったけど、体の中で何かのスイッチが入ったみたいに、花や球根や何かの種や土、プランターなど、園芸用品にまつわるすべてを買うことがやめられなくなってしまったのだ。

こうなると当然、1LDKの室内は花やら観葉植物やらわけのわからない園芸用品でいっぱいとなり、やがて足の踏み場もなくなった。そこであたしは本屋で住宅情報誌を数冊買ってくと、なるべく広いベランダのある部屋へと引っ越しをすることに決めたのだ。

「もっしー、ケイコちゃん？あたしあたし、レイコよレ・イ・コ。悪いんだけどさー、今日泊めてくれない？アパート帰ったらさー、大家が今日こそでてけって言うのよ。どうせ電気もガスも止まっているようなボロアパートだからさあ、酔ってる勢いもあって『ええ、でていきますとも』って、啖呵切っちゃったのよ……うん。え？キヨミ？ケイコじゃないの？」

絹笠玲子は、高校時代の唯一の親友だった。彼女はとても破天荒な性格をしていて、その後まともな社会人となったあたしとは、やがて疎遠になっていった。よくうちの電話番号を覚えていたと思う。だってこれ、間違いなく公衆電話だったから。

「久しぶりだねえ、キヨミ。元気してた？成人式の時以来かなあ。今なにしてるの？え？失業中？」

そこで玲子は何故か「ぐはっ」と血を吐くようにしてからケラケラと笑いだした。

「なによそれー！今のあたしと同じじゃん。あたしも今プー子ちゃんなのよ。あんた今も昔と同じとこ住んでんの？じゃあこれからそっちいくわ。積もる話はそのあとしようよ……うん。そいじゃあ、したっけねー」

ガチャリ、と電話が切れる。あたしは住宅情報誌を閉じると、この部屋にふたり並んで寝るのはきついかもかもしれないと、花と観葉植物のジャングルのようになっている、ワンルームの狭い室内を見回した。夜の十二時過ぎのことだった。

「あーんた、なによこの部屋、おもしろーい！」

玲子は二時過ぎにうちへやってくると——なんと、ススキノから平岸まで、彼女は歩いてやってきたのである！——開口一番そう言った。

「前にきた時はこの部屋、必要最低限以外のものが何も無い、至極シンプルな部屋だったわよね？なあに？もしかして心境の変化ってやつ？」

二時間ほど歩いてすっかり酔いが醒めたのか、彼女は素面に戻ったように〈わりと〉まともだった。長い髪をかきわけながら、テーブルの前にどっかとあぐらをかいている。

化粧がとれかかっているけど、彼女は昔と同じようにとても綺麗だった。早速とばかり、バッグの中からマルボロをとりだし、それに火をつけている。うちには灰皿というものがなかったので、かわりに空缶を灰皿がわりに差しだした。

「相変わらずだね、レイコは。確か前に会った時も家賃滞納して電気とガス止められて……みたいなこと言ってなかったっけ？」

「そうだったっけ？」レイコは空缶の口のところに灰を落としながら笑った。「いつも似たようなことばかりやってるから忘れちゃった。それよかさー、一体どうしちゃったわけ？この部屋。キヨミ、なんかあったんと違うの？」

昔と同じく勘の鋭いところも全然変わってない。あたしは降参するみたいに、清苑不動産を辞めた経緯を、レイコに話すことにした。他の人だったら笑ってしまうだろうこんな話も、レイコが相手なら、何故か自然と話せてしまえた。

「ふうーん。なんか凄い面白い話だね……いや、面白いなんて言っちゃ駄目か。生き方変えないとマジ死ぬ予定だったってことだもんね、キヨミは。だとしたら、あたしたちが今こうして久しぶりに会ったことにも、何か意味があるのかなあ？」

レイコは煙を赤い唇から吐き出すと、考え深そうに小さなちゃぶ台の木目をじっと見つめていた。その彼女の瞳の端に、住宅情報誌が目に入る。

「……もしかしてキヨミ、引っ越すの？」

「うん。部屋の中が植物だらけになっちゃったからね。もう少し広い、ベランダ付きのところ引っ越そうかなあって。よかったらレイコ、うちにいたいだけいるといいよ。あたしも失業中で暇だしさ、ゆっくり……」

と言いかけたところでレイコは何故か、隣に座るあたしの両手を、ぐわしっ！と力強く握りしめた。

「ほんとうにいいの！？実をいうとねー、大家の親父に家財道具全部、処分されちゃったのよ。たった四か月家賃滞納したくらいでさー、まったく心の狭い親父よ。キヨミ、あんたはあたしの命の恩人だわ。どうせならこれから一緒に家賃折半して同居しない！？あたし、すぐに職見つけて、ガンガン働くから」

——レイコの言っていることは全部本当だった。たぶん、わたし以外にも彼女の言う〈命の恩人〉は他にも数名いるはずだった。彼女がいつも貧乏なのは海外へよく旅行に行くため、そのためにレイコはアルバイトを幾つもかけ持ちしたりして年の半分は実によく働くのだ。

「い、いいけど……」レイコの勢いに気圧されながらあたしが頷くと、彼女は「やったあ！」と両手を天井に向けて振り上げ、ジャンプしている。

「じゃあ早速これから、ふたりで住むのによさそうなとこ、探そうよ！」

「う、うん……」

それからあたしたちは三冊も四冊も住宅情報誌をテーブルの上に広げて、夜が明けるまでビールを飲みながら目ぼしい物件にチェックを入れていった。地下鉄駅からなるべく遠くなくて、ベランダがあって、2LDK以上のアパート……あたしとレイコは時々柿ピーをつまみながら、いつしか高校時代の話に夢中となり、その日は結局四時半頃になってようやく、のろのろとふたり

でひとつの布団の中へめぐりこんだのだった。

高校時代、レイコは一種独特のカリスマ性を持った娘だった。あたしとレイコが通っていたのは偏差値がやや高めの女子高で、まわりには真面目で品行方正を絵に描いたみたいなタイプが多かった。でもレイコはそんな中で、ただひとりまるで違っていた。スキンヘッドで登校してきたかと思えば、その次の日にはカツラを着用して先生たちを黙らせた——かと思えば放課後、校門の前でギターの弾き語りをし、妊娠しちゃった同級生の墮胎費用を集めたり——とにかく型破りな行動ばかりの目立つ生徒だった。

そんな彼女と、真面目で品行方正なあたしが何故親友だったかといえ、それは同じ部に所属していたからに他ならない。高校時代、レイコは演劇部の花形スターだった。あたしはただの大道具や小道具を作る係だったけど——彼女の演技には一年の時から光るものがあった。あたしだけでなく、他の部員の誰もがレイコはきっと将来女優になると信じて疑ってないくらいだった。

「懐かしいなあ。二年の時にやった『ベルサイユのばら』。後半はほとんどギャグだったけど……」

ビールの缶を握りつぶしながら、レイコがくくくと押し殺したように笑う。

「あーあれね、あれ。『死んじゃ駄目だ、アンドレ。あたしと結婚してくれるって言ったじゃないかあっ!!』ってレイコがアンドレの襟をつかみながら揺さぶるシーン。そんでアンドレ役の有川先輩が『す、すまない……オスカル』って言ってガクッと死ぬところ。本当は感動的なシーンのはずなのに、何故か会場中が大爆笑っていう」

昔の思い出話をしながら、ふとしんみりした時、あたしはレイコに思いきって聞いてみることにした。女優になる夢を、今はもう諦めてしまったのかどうかと。

「うーん……どうかな。一応今も年に一回か多くて二回くらい、舞台には立ってるよ。まあアマチュアの劇団だけどね、みんな一緒にいて楽しいし……その楽しいっていう領域をいつまでたっても卒業できないのがあたしの限界なのかもしれないなあ」

「そっか。でも羨ましいよ、レイコが。あたしなんてこれといって何も才能なんてないしね。打ちこめる趣味らしきものっていったら、最近はまりはじめた園芸だけかもしれない」

「これだけ道具が揃ってれば上出来よお」

レイコが部屋の中を見回しながらそう笑ったので、あたしも一緒になって笑った。そしてどちらからともなくシクラメンの鉢植えやら観葉植物のアジアンタムやらポトスやらベンジャミンやらの鉢植えを部屋の隅に詰めて置き、その他シャベルやテラコッタや肥料なんかを適当に整理すると、あたしたちは押し入れから布団を一組だして、ふたりでその上に横になり、すやすやと深い眠りに落ちていったのだった。

その次の日からあたしとレイコは不動産屋めぐりをはじめ、中島公園のそばに2LDKのベランダ付き、ペット可という掘出し物物件を発見した。家賃は月四万円で、ふたりで折半するとしたら月二万円という代物だった。

といっても、ふたりとも今現在無職なわけで——家賃を四か月分前払いするという条件で、な

んとか大家さんに入居を許してもらうことができた。

引っ越し当日はレイコの劇団仲間が軽トラックに三人乗って手伝いにきてくれ、大いに助かった。レイコの三人の男友達は以前引っ越し会社でアルバイトをしたことがあるという強者たちばかりで、実にてきぱきと大物も小物もうまく梱包し、要領を得たやり方でえっさほいさと次から次へトラックの荷台にそれらを運んでいった。

古い21型のテレビやらツードアの冷蔵庫やら、その他ソファにタンス等など……一番手間だったのはやはり五十数個はあろうかという鉢ものだったが、美島くんも真鍋くんも浅倉くんも文句ひとつ言うでなく、ひたすら地道に時折ジョークをかましながら二階と一階とを何度も繰り返し行き来していた。

「それにしても姉御と同居とは、これから大変っすね、松山さんも」

いひひ、と何故か訳知り顔で脚本担当の美島くんが言った。姉御、と彼は言ったけど、実際には彼のほうがわたしたちより三つも年上だった。細面の、眼鏡をかけたひょろりと背の高い青年。ふたり掛けのソファを真鍋くんと持ち上げた時、その柳腰が折れたらどうしようと、あたしはかなり本気で心配になった。

「そうですよねえ。姉御、酔ってうちの水道の蛇口、壊したことあったじゃないですか。その他大吾の家では玄関フードを、今川の家ではガラステーブルにヒビを……こんな歩くデストロイヤーと同居したがる人なんて、滅多にいやしませんよ」

こちらも三つ年上、二十六歳の真鍋くんが手で髭をこすりながら言った。隣でベランダの柵にもたれていた浅倉くんが、穏やかに微笑む……とりあえず荷物を全部運び終わり、みんなでジャンボサイズのピザを食べている時のことだった。

「なによ、みんなであたしのこと、一升ビン持った怪獣か何かみたいにな……」

美島くんと真鍋くん、そして浅倉くんが同時に顔を見合わせて爆笑している。

「いまだに自覚してないんだよ、この人」

「劇団『リリック』はじまって以来の酒豪だもんな」

「鬼ごろしや魔王を片手に中島公園を歩くレイコさんが、今から目に見えるようだ」

三人は口々にそう言い合い、思い思いに三階の窓から見える中島公園の姿を見下ろしていた。天気は気持ちのいい秋晴れの空で、ぬるい空気がベランダからは吹きこんできている。なんだか真夏に帰ったみたいな変な天候だった。

正直いってあたしは四人の友情の堅さみたいなものの中にうまく滑りこんでゆくことができなかったけど——それでもなんとなく頷いたり、一緒に笑いあったりしているだけで楽しかった。そして引っ越し代が浮いたことのお礼として、夕方には特上のお寿司を五人前とることにしたのだった。

「こんな奴らに特上の寿司なんてとってやることないのよ」

レイコは三人の目の前でそう堂々と言い放ったけど、あたしとしてはそれがせめてもの感謝の気持ちだった。美島くんも真鍋くんもフリーター生活が長く、寿司なんて食べるの何年ぶりだろうと感動しながら、何故か涙ぐんでいた。なんでも、ワセリンなしでいつでも泣けるのが、真鍋くんの得意技なのだとか。

「えっと、じゃあ美島くんが劇団の脚本担当で、真鍋くんが俳優……浅倉くんもやっぱり同じく

役者さんなのかな？」

適当な大きさのダンボールをふたつ、くっつけてテーブルがわりにした。五人でそのにわか作りのテーブルを囲ってお寿司を食べていると、あたしの質問に、何故か四人の動きがぴたりと静止する。

「やっぱり、そう思うわよねえ、キヨミも」

「だよなあ。俺よかおまえのほうがよっぽど男前だしさ、どっちかっていうと、俺のほうが大道具係でおまえが俳優って、誰でも見た瞬間にそう思うと思うぜ」

腕組みをしてうんうん頷いている美島くんにつられて、あたしもつい、頷きそうになってしまった。正直、真鍋くんはちょっとぷっくり小太りで、鉢巻きの似合う大工さんみたいな風貌だった。それに比べて浅倉くんは、すらりと背が高く、色黒で、サーフィンやってるイケてる兄ちゃん的容姿だった。

「な、なんだよ。俺、絶対役者なんて嫌だからな。最初から大道具専門ってことで、リリックには入ったんだから」

かーっ、惜しい！と言って、レイコが指を鳴らす。どうやら話を聞いていると、浅倉くんは劇団一の美貌の持ち主であるにも関わらず、そのシャイな性格ゆえ、舞台には絶対立ちたくないという、そういう人なのらしかった。

たぶんこのことはこれまでに何度も、みんなの間で話し合われてきたことなのだろう。会話としてはすぐに立ち消えとなってしまったけど——あたしは三人がごちそうさまと言って帰ったあとも、彼が恥かしそうに頬を染めたところを、何故か何度も思い返していた。まるでビデオテープを巻き戻して再生するみたいに、部屋の片付けをぼんやり、ほとんど自動的に行いながら……。

。

「あいつ、ちょっといいでしょ」

え？と振り返ると、レイコのすっぴんの笑顔がすぐ横にあった。しみもそばかすもない、綺麗な白い素肌に、長い睫毛に縁どられた、ぱっちり大きな瞳……ほとんど手入れなんかしていないというのが信じられない。羨ましいと、ほんの少しだけ女心が疼く。

「あいつって、もしかして浅倉くんのこと？」

「他にいないでしょうが。美島はいい奴だけどこんにやくみたいに優柔不断だし、真鍋はああ見えて一応彼女いるし……同じ劇団の子でね、すったもんだの揚句に、来年の春挙式予定なのよ」

「うん、聞いた。俺の青春はもう終わりだとかなんとか」

「あの三人の中で——っていうより、うちの劇団の中で唯一まともっていうか、一番まともなのがシンなのよ。あいつのこと今日呼んだのもさ、あたしの男友達の中で胸張って紹介できそうなの、あいつっきゃいないからなのよ。まあ昔、家具職人になる前、引っ越し屋でバイトしてたっていうのももちろんあるけど」

その時あたしは新聞の包みからだした鉢植えに、水をやったり霧を吹きかけたりしていたところで——正直、驚きのあまり噴霧器を床に落としてしまった。

「な、なによそれ。あたしそんなこと一言も……」

「そうよ。べつに頼まれてなんかいいわよ。もちろんシンにも何も言ってない。でもあいつとはかれこれ五年のつきあいになるけど、今日のあいつ見たかぎりだと、脈ありって感じだったな。普段あいつ、あんなにしゃべんないもん」

五人で八時過ぎまで話しこんでいたため、正直荷ほどきは十時現在、あまり進んではない。とりあえず植物たちをダンボール内の息苦しさから解放し、あとは身の回りのものを必要最小限片付けた程度。居間とキッチンを挟んだ玄関側の部屋があたしの部屋で、押し入れのついた寝室にあたる部屋がレイコの部屋ということになっていた。

「見た目結構モテそうに見えるけど、あいつもオクテだからね。この秘密バラしたらシンに殺されそうだけど、あいつ色が黒くて鼻筋が通ってて外人みたいな顔してるでしょ？ずっとそれがコンプレックスだったんだってさ。小さい時からみんなと写真撮るたびに自分だけ違うって思ってたんだって……つまり、そういう内気な奴なのよ」

「でもわたし、関係ないし」と、あたしは宝珠やベンジャミンの葉っぱなんかに、艶だしスプレーをかけながら言った。「もちろん引っ越しを手伝ってくれたことに感謝してるけど、だからどうってということもないでしょう？確かにちょっと格好いいなとは思ってたけど、でもそれだけよ」

「ふうん。ならいいけどさ」

とりあえず今日は居間に敷いた、布団の上にごろりとレイコは横になっている。トレーナーを脱ぎ、ブラジャーを外すと、その上からストライプのパジャマを着ていた。

「一応、それでも一言いっとくよ。自分の心に素直じゃない女の子には、恋の神さまは振り向かないんだからね。そんじゃあおやすみ」

——スナオじゃない女の子には、コイの神さまはフリムカナイ。

隣でレイコの歯ぎしりを聞きながら、あたしは薄暗闇に目を凝らした。まだカーテンをつけていないので、満月の光がベランダの窓から煌々と差してきている。

(恋なんて……)

とあたしは思った。ろくに恋愛経験もないのに、あたしは恋というものを馬鹿にしていた。もちろんあたしも、片想いくらいはしたことがあったし、友達にお節介を焼かれて、相手を紹介されたりだとか、そういう経験は人並みにあったけど——浅倉くんとだなんて、全然ピンとこなかった。ああいうファッション雑誌でポーズを決めてそうな男の子には、同じようにファッション雑誌から抜けでてきたような女の子がお似合いだと、そう思った。たとえば、レイコみたいな。

(もしかしたら彼、レイコに気があるのかもしれないわよね。レイコが自分でそうと気づいてないだけで……)

あたしはそこまで考えると、浅倉真一郎くんの浅黒い顔を思い浮かべるのをやめた。女がふたりで同居していて、ひとりの男を奪いあった揚句、気まづくなって別居……だなんて、昔のトレンドドラマじゃあるまいし。やめたやめた、馬鹿馬鹿しいって、本当にそう思った。

### 第3章

---

「レイコさんと同居だなんて、なんて命知らずな……」というようなことを、美島くんも真鍋くんも浅倉くんも言っていたけれど、今のところ水道の蛇口も、テーブルも玄関のドアも無事だった。

同居をはじめてまだ一週間しか経ってはいなかったけど、あたしは最初からこの同居生活で、レイコには何も求めていなかった。ゴミは交替で捨てましょうとか、お風呂洗いは順番にとか、食事の仕度や掃除は……なんていう細々したことは一切決めなかった。「こういうことは初めが肝心なのよ」とレイコは言ったけど、それはふたりがともに働いている場合だと、あたしはそう主張した。何しろ最初の口約どおり、彼女は引っ越しの翌々日には新しいアルバイト先を見つけていたから。

「あたしは今働いてるってわけでもないし、貯金が暫くの間の持つ、悠々自適なプー子ちゃんなわけ。そんでもってレイコは一日八時間も立ちっぱなしの、明朗快活なウェイトレスさんなわけでしょ？べつにあたし、毎日ごはん作ったりとかお風呂掃除したりしても『なんであたしばっかり』とか、そんなふうには全然思わないよ。どうせひとりでカレー作ったりしてもあまるだけだし、ひとりもふたりも大して違わないもん。だからべつに、気にしなくていいよ」

それでもレイコとしては気になるのか、お風呂掃除とゴミ捨ては彼女が担当することになった。美島くんや真鍋くんに引っ越しを手伝ってもらって以来、劇団リリックの人たちが噂を聞きつけて夕ごはんを食べにきたりもしたけど——あたしはべつにそのことを迷惑だとは全然思わなかった。OL時代の五年間に貯めたお金は三百万ちょっと。放っておけばそれは減る一方ではある。それでもあたしは闇川ヨミさんの予言もあるせいか、なんとかなるだろうと思っていた。それより何より生活が一段階引き上げられて、これから先はきっといいことばかりが人生にはあるに違いないという、根拠のない楽しさがあった。やはりあたしは闇川ヨミさんの言うとおりに会社を辞めてよかったのだと、改めてそう思う。このまま永遠に続くかのように思われる、ベランダからの美しい夕景色を毎日眺めながら。

劇団リリックの人々は、団長の石田さんをはじめ、揃いもそろって変人ばかりだった。そしてみな共通して貧乏だった。なので、うまく良い同居人を見つけたレイコのことを、口々に羨ましいとみんなは言った。

「毎日こんなに美味しいごはんが食べられて、いざとなったらお金も貸してくれて、変な仲間を呼んでもこれっぽっちも怒らないだなんて、松山さん！あなたは天使のような人だ、いや神さまだ！」

石田さんはうちにくるたびに大体これと似たようなことを酔ったついでみたいに言う。それとしょっちゅう冗談で「松山さんみたいな人と結婚したい」とか「松山さんみたいな人と結婚できる男は幸せものだ」と言ったりするけど、あたしは全然本気にしていない。

何故かといえば警備員の仕事をしている石田さんは、警察官のような格好のままふらりと仕事帰りに寄っては、インターホンの前で犬の鳴き真似をしていたから。ようするに、ごはんを食べさせてくれる人なら誰でもよいしょしまくるという、そういうちょっとお調子者っぽいところの

ある人なのだ。

そしてそれと正反対なのがシンくんこと、浅倉真一郎くん。彼は何か用事がないかぎり、うちにくることは決してなかったけど——それでも週に三日くらい、遠慮しながらもごはんを食べていくようになった。ちなみに団長の石田さんとは同じ高校の同級生らしい。ふたりはあたしやレイコよりも四つ年上の二十七歳だった。

「駄目ですよ、キヨミさん。平吉の奴は図々しいから、一度いいっていったら、ずるずる骨までしゃぶるようにたかってくる奴なんだから。注意しないと」

シンくんは今日もぶつぶつ言いながら、うちのベランダで鉢植えをのせるための台を作っている。彼がノコギリを挽く、不思議に滑らかな音が耳に心地好い。秋の夕暮れのベランダには、今ふたりっきりだった。

「ごはんくらい、べつにいいのよ。それにヘイキチくんもああ見えて、一応気を使ってくれるんだから。レイコが遅番で夕方に出勤する時とかは、絶対にこないの。はっきり聞いたわけじゃないけど、ちゃんとレイコからそういうことも聞いてるみたい。それでみんなが集まる時とか、レイコのいる時しかうちにはこないの」

「俺から言わせたら、そんなのあたり前ですよ」と、シンくんは何故かむくれたように言った。「大体、キヨミさんはちょっとどころじゃなくかなり、人が好すぎると思います。べつに変な意味で言うんじゃないけど、今だってそうでしょう。知りあって間もない男を簡単に部屋に入れたりして」

「えっ!？」と、あたしはびっくりして言った。「だってそれは、シンくんがプランターをのせる台を作ってくれるっていうから……」

「それはただの口実です。ヘイキチの奴が変な時にやってきて、キヨミさんを口説いたりしたら困るなと思ったから」

彼は電動ノコギリを脇に置くと、丸みを帯びた細く長い板を三枚、組み立てていった。そのあと一言も口を聞くこともなく、ただひたすら黙々と。

考えてみると、シンくんがうちにやってくる口実には、幾つかバリエーションがあったように思う。レイコが以前住んでいたアパートの大家に家財道具をすべて処分されてしまったため、シンくんの働いているアンティークショップの在庫商品を幾つか、ただでもらえるということになった。アンティークショップといっても、古くて珍しい家具の他に、シンくんと店の店長のふたりで作ったオリジナル家具を売っているという、そういうインテリアショップのような店である。

彼は昔、某家具メーカーで家具職人として働いていたが、ただ決められたとおりにパーツを組み立てるだけの仕事に三年くらいで飽き足らないものを感じるようになったという。そんな時、札幌駅の近くで小さなオリジナルの家具を販売している今の店長に出会い、自分を雇ってくださいと、必死に頭を下げて頼んだのだそうだ。店長もまだ若く、店が全然軌道に乗っていなかった頃の話で、正直人を雇う余裕なんて全然なかったらしい。それでもシンくんの真剣な眼差しに職

人魂のようなものを感じた店長は、赤字覚悟でシンくんのことを雇い、今では彼は店になくはならない片腕のような存在になっていると、レイコからはそう聞いた。

「だからね、ヘイキチみたいなお調子者と違って、シンみたいのはいちいち口実作らないところへは来れないわけなのよ」

シンくと石田さんがジンギスカンを食べて帰ったあと、レイコはテレビを見るときはなしに見ながら、ビールを飲んでいた。シンくんの作ってくれた美しい赤茶色のテーブルに片腕をつきつつ。

「あたしからしたら、はっきり言ってシンもあんたも馬鹿みたいよ。いちいち人をダシにして新品のテーブル持ってきたり、タンス持ってきたり……店であまったからだって？かーっ、馬鹿じゃないの？こんな丹精こめて作ったようなのばっか持ってきて。品物見ればわかるじゃないよ。

『これは僕が心をこめて作りました』って張り紙がしてあるようなものだもの。キヨミ、それであんた一体どうするつもりなわけ？このままいったらあいつ、サイドボードが余ったとか食器戸棚が余ったとか言って、うちの家具全部とり替えるつもりなんじゃないの？」

「まさか……」と、苦笑いしたあたしのことを、レイコは軽く睨んだ。

「あんたさあ、いいかげん人の心弄ぶのやめにしなさいよ。そりゃああたしも最初は、ただでいい家具もらえてラッキーとか正直思ったわよ。でも本当はあんただってとっくの昔に気づいてるんでしょ？シンみたいな奴がここまでするっていうのは、凄いエネルギーのいることなんだから。まあね、もしキヨミが本当はヘイキチのことが好きで、シンの気持ちは有難い反面迷惑してるとか、それならそれで仕方がないよ。でもね、シンが今日そこまであんたに言ったってことは、そのうち返事をもらえるだろうって期待して待ってるっていうことなんだから。『はっきり否定しなかったっていうことは、きっとキヨミさんも……』とか、そんなふうだね」

「う、うん……」

あたしはホットプレートを片付けながら、少し複雑な気持ちになった。それならそれで、何故彼ははっきり「つきあってください」とか、ストレートに言わないのだろう。あたしはむしろそういう言葉をこの一か月間、待っていたようなものなのに。

「まあ、いいけどね、あたしはね。キヨミがシンのことを好きでもヘイキチのことを好きでもどっちでも。だけど、いいかげんアタマにくるのよ。ヘイキチもシンのことがなければあんたにプロポーズしてるでしょうよ。でもシンの店で作った特注のカーテンだのあいつがくれたテーブルだのを見て、きっと思い留まってるのよ。あいつはまあもしキヨミが実はシンのことが好きだって言ったとしても、今までどおり何もなかったみたいここへごはん食べにくるでしょうよ。でもシンは違うのよね。さんざん期待させられたけど裏切られたって、そんなふう感じてもう二度とここへは来ないでしょうね」

レイコはテーブルに両手をついて立ち上がると、隣の自分の部屋へ「おやすみ！」と言って引きこもってしまった。喧嘩、というほどのものではないかもしれないけど、初めて喧嘩らしき、気まずい思いをした夜だった。

浅倉真一郎くんのことを好きなのかと言われたら、確かに好きなのだろうと、自分でもそう

思う。一度、カーテンを注文するために彼の店を訪れたことがあるけれど、彼はとても真剣に家具というものと向きあっていた。店の裏手にシンくんと店長がふたりで使っている木工室のようなところがあり、引き戸を開けると、そこは木のよい香りで満ちていた。そしてその匂いとともに、自分はこの人のことが好きなのだと、はっきりとそう感じた。

でも、それだけだった。

確かにシンくんのことは好きだ。でもそれ以上強く背中を押す激情のようなものは自分にはない。ヘイキチくんにもそういうものは一切感じない。たぶん、自分は怖いのかもかもしれないな、とは思っている。

お母さんにとって自分が居心地のいいアンティークの一部ではないかと錯覚したことが時々あったように——彼とつきあって、仮にもし結婚したとしても——結婚して三年か五年もすれば自分は、彼にとって出来映えの気に入っている家具のひとつにすぎなくなってしまうのではないかと、そんな感じのすることが。

次の日、意外にもレイコは、シンくんの作ってくれた赤茶色のテーブルに両手をついて、朝一番にあたしにあやまっていた。

「実はきのう仕事でヘマばかりしちゃってさあ、すごいイライラしてたのよ。でもよくよく考えてみたら、これはシンとキヨミの問題なのであって、あたしが余計な口だしすべきことじゃないと思って反省したわ。もしキヨミがシンのことをこっぴどく振ったとしても——それはそれでいいんじゃないかって気もするのよね。あいつにとってはまあ、いい女の人生経験ってことになるかもしれないし」

サラダにするため、鶏のささみを裂きながら、またレタスをちぎったりしながら、あたしはテーブルの上で新聞を広げるレイコのことを、対面キッチンのカウンター越しに見つめた。

「……ねえレイコ、一言聞いてもいい？」

「ん？」と、レイコが新聞をめくりながら、水音のするほうを振り返る。あたしは蛇口をひねって止めた。

「いつも思うんだけど、なんだかあたしたちって、新婚の夫婦みたいじゃない？」

ブツ、とレイコが吹き出す。

「なあによ、それー！まあキヨミの言いたいことも、わからないではないけどさ。して、その心は？」

「つまりね、たぶんあたし、シンくんのことよりもヘイキチくんのことよりもずっと、レイコのこのほうが好きなんだと思うの。それがシンくんともっと深い恋愛関係になれない理由なんじゃないかって、きのうの夜、ふとそう思ったもんだから」

「んー……」レイコは照れくさそうに、ぼりぼりと長い髪をかいている。

「まああたしもね、シンやヘイキチの気持ちはなんか凄くよくわかんよ。キヨミ料理うまいし、うまい料理は男心を殺すっていうの？それだけじゃなくてさ、キヨミ、今まで男とはつきあったことないとか初対面ではっきり言っちゃったじゃない？あれもねー、変な意味で言うんじゃないけど、あいつらにとってはポイント高かったと思うの。料理は美味しいし、性格は素直だし、変な手垢のついてない、今時珍しいお嬢さんって感じでさ。正直ってあたしも、自分の可愛い

娘を野犬や狼から守る父親みたいな気分よ」

今度はあたしのほうがぷっと吹きだす番だった。

「なあに、それ。うまく言えないけど、あたしはシンくんもヘイキチさんも、もしかしたらレイコも——ちょっと誤解してるんじゃないかって思ってるわ。前に言ったでしょ？変な夢ばかり見て、有名な占い師の人に見てもらったことがあるって。ようするにあたしは、凄くずる賢くて計算高い女なのよ。だからそういう損得計算でこれから先もずっと生きていったとしたら……精神病とか、そういう病気になったりしても自業自得だっていう、そういうことだったんじゃないかって、今は本当にそう思うの。だからレイコはあたしの命の恩人っていうか、命よりも大切な魂の恩人なのよ」

「魂の恩人ってあんた……」

大袈裟ねえ、とレイコがけらけらといつもの笑い方で笑いだす。

「あたしから言わせたら、あんたのがよっぽどお人好しよ。あたしだったらたぶん、そんな占い師の言うこと絶対信じないもん。それですぐ占い師の言ってるたとおり毎日納豆食べたりだとか、変な連中に文句も言わずに腹いっぱい食べさせたりだとか……絶対しないわね。キヨミは自覚してないかもしれないけど、そういうあんたの実行力のほうがよっぽど偉大なんじゃないかって、あたしはそう思うわ」

あたしは赤茶色の食卓テーブルの上に朝食の品を並べながら首を傾げた。ササミのサラダにスクランブルエッグとベーコンとクロワッサン、これがレイコの朝食で、あたしのはごはんとお味噌汁と有機丸大豆の納豆。

「そうかなあ」と、あたしは食卓に着きながら言った。レイコがテレビのスイッチを押し、小さな音でNHKのニュースをかける。いつもの朝の風景だった。

「そうよお。まあ、自覚のないところがキヨミのいいところっていうか、可愛いとこなんだろうけどね。で、まさかとは思うけどあんた、実は自分はレズビアンですとか言って、シンとヘイキチのこと、振るつもりじゃないでしょうね？」

「レイコにその気がないんじゃない、仕方ないじゃない」

わざと拗ねたように言うと、レイコはコーヒーを吹きだしそうになっている。

「あっはっはっは……やっぱ、面白いわよねえ、キヨミって。まさかとは思うけどさあ、あんた、誤解してたりしないでしょうね？実はあたしがヘイキチにホの字だとか、シンに対して心密かに思いを寄せているとか、そんな気持ち悪いこと」

「気持ち悪いて……」フォローの仕様がなくて、あたしは目の前のレイコのことをじっと見つめた。

「ほら、あたしたちってつきあいが長いじゃない？ヘイキチともシンとも、知りあって五年っていう仲だし、劇団の舞台稽古とかさ、そういうのを通して自分たちのいいところもみっともないところも全部、知り尽くしちゃってるわけ。だからなんていうのかなあ、本人たちには悪いけど、正直って最初のうちは抱腹絶倒ものだったわ。あいつら、キヨミの前でいい格好しようとしたりさ、あたしの目の前で平気でそういうことするじゃない？まあそれだけ心を許してるってことなのかもしれないけど……だから右に転ぼうが左に転ぼうが、あたしとあいつらが恋愛関係にな

るなんてこと、絶対にありえないわけ。それでもほんのちょっとだけ妬かなかったと言えば、嘘になるかもしれないけどね」

レイコはパセリを口に放りこむと、どうしようかなあ、というふうに首を傾げ、喜怒哀楽の四面相を五秒くらいのうちにやったのち、芝居がかった調子で、テーブルに肘をついていた。

「『お嬢さん、あっしに惚れちゃあいけないぜ……いや、あたいが女だからとかそういうことじゃあなく、屁こきのヘイキチはともかくとしても、シンの気持ちには真剣に答えてやりやにあならん。それが人の道ってもんですぜ』」

「よっ！日本ー！」

思わずあたしが掛け声をかけると、レイコはどっと疲れたように肩を落としていた。彼女の格好は今パジャマ姿だったけど、襟を立てたレインコートとその後ろに広がる港とが、背後にだぶって見える。

「レイコ、今霧笛が後ろでポーッと鳴ってるよ」

「マドロスさんかよ、あたしゃ」

あたしたちは顔を見合わせて笑うと、いつものように楽しい朝食のひと時を満喫した。眩しい緑の観葉植物と、ミニバラやカラコエやシクラメン、君子ランやジャスミン、ベゴニアやガーベラ、ポインセチアやデンドロビウムやシンビジウム、オレンジウムや胡蝶蘭……などの鉢植えに囲まれた部屋で。

中島公園前から地下鉄南北線に乗り、札幌駅で降りると、あたしはシンくんの勤めるアンティークショップ『バルンタイン』まで歩いていった。駅北口から地上に出、北大に向かう途中、古本屋と小さな喫茶店のある通りにバルンタインはある。

店の見た目は家具ショップだということにとっても小さい。店の表にはそれでも、人の目を引く美しいアンティークの家具が展示され、店内には十数点の家具やシャンデリアの他に、お洒落な外国輸入雑貨がところ狭しと並べられている。

正直、何も知らない人がこの店を見たら、年金暮らしの隠居老人が趣味でやっている骨董品屋だと思ってしまうかもしれない。けれどもレイコに聞いた話によると、バルンタインの主な収入源は特別注文で承る高級家具、とのことだった。

「ああ見えてあの店、シンのお陰で結構儲かってるらしいわよ。デパートからも出店しないかっていう話もきてるらしいけど、店長がまだ若いくせに頑固なのよね……まあ『こんな収入の不安定そうな男と結婚してどうすんのかしら自分』みたいな心配だけはしなくても大丈夫よ」

そんなこと、気にしてないと言うとレイコは、「金持ってんどー」と言って千昌夫の物真似をしていた。何故かという、シンくんの額の真ん中らへんには、ぽつりと黒い小さなほくろがあるからだった。普段は厚い前髪に隠れていて見えないけれど。

「あいつは将来、高級家具メーカーで一儲けするか、人が好くて騙されて借金背負いこむかのどっちかでしょうね。まあどっちにしても夢があるじゃない？バルンタインなんて家具、今は誰も知らないけど、いつか誰もが憧れる理想の家具メーカーに成長するかもしれないし……捕まえとくなら今のうちかもよ」

何言ってるのよ、もうと言ってあたしはレイコの背中を冗談ぽく叩いていたけど——でもある

部分、レイコの指摘は彼女のわからないところで当たっていた。前までのあたしだったらそう、結婚を考える時に一番気になったのは相手の職業とか年収とか、そんなことばかりだっただろう。でも今は違う。かといって大切なのはフィーリングよね、とかそういうわけでもなくて——うまく言えないけど、とにかくシンくんには何か、そういうあたしの欠落を埋めるための何かがあるような、そんな感じがしたのだ。

「ごめんください」

店の裏手にまわり、古くさい木戸を横に引くと、おがくずなどが散らばっているのがまず目に入る。壁には幾つもの種類の木材が立てかけられ、木を削った時の心地好い匂いが満ちていた。あたしは思わず深呼吸した。

「……キヨミさん。どうしたんですか、急に」

彼は首に巻いていたタオルで額のあたりを拭くと、慌てたように床を掃除しはじめた。はっきり言って掘っ立て小屋みたいな木工部屋。下は埃っぽい土が剥きだしで、壁と天井はトタン板にトタン屋根だった。にも関わらず部屋の隅にはスウェーデン製の立派な薪ストーブがあったりして、よくわからないといった感じがする。

「何か俺に用事でも？」

そんなに気を使わなくてもいいのになあと思いつつ、あたしは箒と塵とりを手に掃除を続けるシンくんの姿をじっと見つめた。大きな平均台のようなものに支えられた板の上に、シンくんが今カンナで削っていた木材がある。隣には作りかけのテーブルや椅子やチェストなどがあり、それらのまだ未完の品物は、そのままで十分買う値打ちのあるもののように見えた。

「完璧主義なのね、シンくんて」と、あたしは彼と一緒にしておがくずなどを拾い集めながら言った。「だからうちにも、いちいち用事がないと来られないのね」

「え？」とシンくんは振り向き、何度か哀しそうな眼差しで、あたしのほうを見つめた。見捨てられた犬みたいな目つきだった。

「前にきた時も思ったんだけど、うちにあるテーブルもタンスもベッドも、ここでこうしてシンくんが作ってくれたんでしょう？もし仮に余りものだったとしても……お店にだしたら二十万とか三十万とか、そういう値段よね、きっと」

シンくんはそれには答えず、そんなことしなくていいです、と言ってあたしの手からおがくずを払った。シンくんとあたしでは、身長差が二十センチくらいある。彼に屈みこまれた時、正直ちょっとドキとしたけど——彼はいつものように目を合わせることもなく、スタスタ歩いて作りかけの椅子をあたしの元まで持ってきた。

「ようするに、迷惑だっていうことですか」

彼はコンソールの上に無造作に腰掛けると、手元の工具をいじりながら作業服の袖なんかで、意味もなくそれらを磨いている。

「べつに迷惑っていうわけじゃないけど……あたしはそんなに高価なものばかりもらったら、レイコみたいには能天気には喜べないもの。だからごはんくらいって思ったんだけど」

「けど？」

シンくんは初めて、椅子に座るあたしと、はっきり視線と視線を交わらせた。

「その度に色々お礼してもらったりしたら心苦しいなって思っただけ。元手のほうは圧倒的にシ

ンくんのほうが高くついてると思うから」

「それはそうですよ」と、シンくんはなんでもないことのように優しく笑った。幾分、ほっとしたような表情で。「自分で言うのもなんだけど、俺は不器用だから、そういうふうには表現できないです。だからもしキヨミさんがそういうの、鬱陶しいなと思ったら正直、つきあったりしてもうまくいかないだろうなって勝手にそんなふうに思ったりして」

「それはつまり、これまでに誰かに、そう言われたことがあるってこと？」

「いや、べつに」と言って彼は顔を背けた。でもなんとなく、女の匂いが影でした。シンくんはこれまで、ふたりくらい女の人とつきあったことがあると、レイコからは聞いていた。

「ヘイキチはお調子者だけど、いい奴です。要領もいいから、人にも好かれる。俺も、あいつのことは好きです。性格正反対だけど、なんとなく気も合うし」

「そうね」と、あたしもふと和んでそう言った。「あたしとレイコも同じだから、なんとなくわかるような気がする。だから逆に気が合うのかもしれないし。でもこんなこと言ったらあれだけど——ヘイキチくんやレイコの性格を<陽>としたら、あたしたちの性格ってどっちかっていうと<陰>だと思わない？だからそういう人間同士がつきあっても、うまくいくのかなって」

「どうでしょうね」と、シンくんは笑いながら言った。なんとなく、昔飼っていた犬のモ口を思わせる、優しい微笑みだった。「ヘイキチとレイコさんがつきあったら、まあまずうまくいかないと思うけど……俺はキヨミさんのことは絶対に大切にします。料理がうまくていいカミさんになりそうだからとか、そういうことじゃなくて、俺、キヨミさんの昔の部屋に最初にいった時から好きだった。植物の鉢植えがいっぱいあって、俺にとっての木が、キヨミさんにとっては植物なんだなって、そう思ったから」

「あのね、変なこと聞いてもいい？」あたしは舞い上がりそうになる心を必死に抑えながら、一番大切なことを彼に聞かなくちゃと思った。「シンくんが大切にしてくれるって言うてくれたのは凄く嬉しい。でも、あたしは家具でも植物でもないし、シンくんが家具作りに命をかけた魂をこめて作ったりしてるのはよくわかるんだけど——それと同じように大切にしてくれたとしても、あたし困ると思うの。何も言わなくてもあうんの呼吸でとか、そういうのはあんまり求められたくない。言ってる意味、わかる？」

「わかります。とてもよく」そんなことは当たり前だというように、シンくんは笑った。窓からの金色の陽に透ける笑顔。木工部屋のすべてを西陽が満たして、なんだか部屋全体が魔法にかかったみたいな感じだった。

「俺は無口なほうだけど、でも人としゃべるのはすごく好きだから大丈夫。家具作りに求めるようなことを、キヨミさんには求めない……って言ったら変かもしれないけど、俺にとってはそもそもそのふたつはまったく別のものです。それに同じだったら、死ぬまで自己愛の世界に生きるしかないわけだし」

シンくんが、あたしが思っていた以上にわかってくれていて、あたしは何故かほっとした。そしてこの後も、彼を見くびっていたと言うべきか、色々な局面で彼には驚かされた。見た目と話し方と内面が全然違う人なんて——はっきり言って初めてだった。これで彼がもしもう少しナルシスティックな人物だったとしたら、稀代の大俳優になっていたと、あたしはそう断言しよう。

「あいつね、初めて彼女とつきあった時『背後霊みたいに気持ちがずっしり重い』って言われて振られたんだって」

真っ暗な闇の中、くすくすというレイコの忍び笑いが響き渡る。あたしとシンくんは、つきあいはじめてたったの二か月で、半分同棲するような感じになっていて、三か月たった今では、彼のアパートに泊まることのほうが多くなっていた。でも今日は、レイコが明日、東京へ門出することが決まっていたために——女ふたりでひとつの布団に眠り、心ゆくまで語りあう予定だった。

「シンは物とか作ってるせいか、ひとつひとつの物事に意味を求めすぎる嫌いがあるのよね。そうすると、自分の持つ雰囲気とかもさ、自然濃いものにならざるをえないわけじゃない？いくら本人がナチュラル志向を目指してたとしてもさ」

「でもシンくんは……とても素敵よ」と、あたしはいつものように思いきりのろけた。「才能のある人はたぶんみんなそうなの。じゃないと長く物を作ったりするエネルギーは生まれてこないでしょ？そういう意味ではレイコだって一緒よ」

「あたしー？」と、レイコは布団の中で大爆笑している。「シンとあたしは全然違うってば。月とスッポン、水と油くらい違うわよ。まあ家具作家も俳優も、広い意味で芸術家といえば芸術家かもしれないけど……あたしにはシンみたいな＜濃さ＞はないもの。あいつはまあ俳優にたとえたらアル・パチーノとかロバート・デ・ニーロだわね。でもあたしが目指してるのはジュリア・ロバーツとかキャサリン・ゼタ・ジョーンズだもん」

「頑張ってるね、レイコ」あたしは布団の中に手を忍ばせると、彼女の手をぎゅっと握った。「劇団四季のオーディションに受かるなんて凄いのよ。レイコはやっぱり特別なんだよ。高校生の時からずっとそう思ってたけど……あたし、そのうちレイコが絶対、テレビとかに映るって信じてるんだ」

「なによ、大袈裟な……」と言いながらも、薄暗闇の中、レイコの瞳は潤んでいた。いつもどおりに振る舞いながらも、本当は心細いのだとわかっていた。直接には何もしてあげられないけれど、繋いだ手と手の間から、強い、霊的ともいえるほどのエネルギーが伝わればいいと、そう思った。

「あたし、レイコと出会ってから人生変わったよ。高校生活も、レイコのお陰で楽しかったし……何より、シンくんに出会えた。それまではね、ずっと凝り固まった世界で暮らしてたの。石みたいに硬くて揺るぎのない世界。でもそんな世界、本当は大きな地震がやってきたりしたら、すぐにぺしゃんこになっちゃうようなちっぽけな世界なの。あたし、レイコがああ時間違って電話をかけてくれなかったら、あのまま彫像みたいに硬い人生を送っていたかもしれない。だから、ありがとう」

「キヨミのことを直接変えたのはシンだよ、やっぱり」と、レイコは照れたように鼻をすすった。「だから、あたしがキヨミに何かしたってわけじゃないんだよ、全然。むしろ何か月もただで美味しいごはん食べさせてもらってさ、あたしのほうこそ凄く感謝してる。これからはなんでもシンを頼っていけばいいんだよ。あいつはああ見えて芯のところがしっかりしてるから、ちょっとやそっとじゃぽきりと折れたりしない。最近ちょっと見かけなくなった、珍しく男らしいタイ

プかもしれないね」

「うん、わかってる」

あたしが照れたように笑うと、レイコも体を震わせながら笑いだした。そしてだんだんお互いの振動の伝わりが大きくなってくると、最後には大笑いになった。

「のろけちゃってえ、このおっ！」

ばっしっ！とレイコがあたしの肩を思いっきり叩く。

「シンの奴、ああ見えて意外に手、早かったよね。正式につきあいはじめて一週間くらいでキスしてさあ。一か月もしないうちにあんた、あいつの家に入り浸るようになったもんね。そんなにあいつのセックスって気持ちいい？」

うん、とつてもと答えるわけにもいかず、あたしはただ照れたように笑うしかなかった。

「その……気持ちがこもってるっていうかね、いちいち凄く丁寧なの。あたし、他の男の人はどんなのかとか全然知らないけど、べつに知りたいとも思わないなあ、なんて」

やれやれというようにレイコは軽く溜息を着いている。何故か少し幸せそうな、甘い溜息。

「ようするに、あいつはセックスのほうもいちいち内容が濃いわけなのね」

——あたしはそれからシンくんのことばかりを話してレイコのことを辟易させたあと、夜中の二時頃だっただろうか。どちらからともなく、眠りの世界へとあたしたちは飲みこまれていった。

その夜、とても不思議な夢をあたしは見た。

舞台の上でチーターの模様の水着を着たレイコが、人間の言葉ではない、動物にしか通じない言葉で何かを叫んでいる。すると後ろのジャングルから、猿の格好のヘイキチくんや、ゴリラの着ぐるみの真鍋くん、ライオンの格好の美島くんや、その他犬や猫など、動物の姿をした劇団のみんながでてくる。あたしはたくさんのお客さんと一緒に観客席にいた。拍手をしている。そして劇を楽しみながらも、ある人物の姿を目で探していた。自分の最愛の人である、浅倉真一郎くんの姿を。

けれども彼はいつまでたつても舞台には現れず、痺れをきらしたあたしは、舞台裏へとまわった。もしかしたら彼に何かあったのかもしれないと、焦りに似た心配を覚えたためだった。そっと黒い幕を持ち上げると、何故かそこは深い密林のような場所で——甘い南国のフルーツの香りがした。そしてその匂いを一度かいでしまうと、あたしは劇団リリックのことも、舞台の上のことも何もかも、すっかり忘れてしまった。この甘い香りの源になっている果実がどうしても食べたかった。匂いをかいただけで口の中がつかでいっぱいになっているのがわかる。

でもなつめ椰子やココナツの実は、あんまり高いところに実っているため、あたしには登って行ってそれをとることは不可能だった。哀しみながら足許の石を蹴っていると、遠くで海のさざ波の音がした。ここから海は見えないけれども、テレパシーのような何かによって、あたしには船に乗って誰かがやってきたのがわかる。

「ごめんね、遅くなって」

上半身裸の、原始人みたいな格好をした浅黒い肌の彼は——シンくんだった。何故か前髪をオールバックにしている、額のほくろがいやでも目につく。

あたしが言葉もなくしくしく泣いていると、彼は手に持っていた槍で椰子の実をとってくれた

。地上に落下すると同時に、椰子の実はぱっくりと真ん中から綺麗に割れていた。そこからずっと待ち望んでいた甘い香りが漂ってくる。

(暗転)

気がつく、あたりは真っ暗闇だった。何もない本当の真の闇。

虚空というのか真空というのか……その闇を裂いて、真っ黒い蒸気機関車がどこか遠くから線路の上を走ってくる。

シュッシュッポッポッ！

シュッシュッポッポッ！

ポォ————ツ！

夢の中で、あたしの意識は蒸気機関車そのものと完全に溶け合っていた。果たしてどこを目指しているのか、終点まで遠いのか、途中の駅で停まる予定なのかどうかもわからない。あたしにわかっているのはただ、自分が今途方もなくエネルギーだということだけだった。

シュッシュッポッポッ！

シュッシュッポッポッ！

ポォ————ツ！

蒸気機関車は闇の中を怖れることもなく進み続け、恐ろしい断崖絶壁のような場所をひた走り、大きな闇の川にかかる長い鉄橋の上を勢いよく滑らかに走っていった。

シュッシュッポッポッ！

シュッシュッポッポッ！

ポォ————ツ！

目が覚めた時、ベランダからは月光が、隣からはレイコの歯ぎしりがしていた。あたしは薄暗闇の中目を凝らし、そして思いを巡らせた。自分は多分今きっと、精神的な大きな川を渡って何かを乗り越えたのではないかと。目を閉じると、闇の川の艶やかなうねりがまざまざと思い浮かぶ……世界全体、宇宙全体を通したら、あたしの人生の変化など、ほんのとるに足りない本当にちっぽけな変化かもしれない。でもそれでも——こんな小さな変化にも耳を澄ますようにして生きていきたいと思った。もし仮にあたしがどんなに幸せであったとしても、それに<気づく>ことができなかつたら——石の像は深い闇の中、今度こそあたしの魂の心を探りあて、本当にその中身を貪り尽くしてしまうだろうと、そんな気がした。

終わり

## ダークリバー

<http://p.booklog.jp/book/29476>

著者：ルシア

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/lmnlive/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/29476>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/29476>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.